

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

川中 薫

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

現代インドの繊維産業—多様な人・もの・資本をつなぐ知識のネットワーク—

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、現代インドの繊維産業において、地域固有の社会・生態・文化的特徴を生かした、知識のネットワークという視点から、生産をささえる多様な資源要素(人・もの・資本)のマネジメントを明らかにすることである。知識のネットワークとは、情報の非対称性が大きいインドにおいて、豊富だが多種多様に存在する人的・物的資源と資本を適材適所に組成するための、情報収集とコミュニケーションを可能にする機能と定義できる。継続的な成長を遂げてきたインド繊維産業の国際比較優位を、安価な労働力や原料、もしくは補助金等の政策的背景のみにもとめるのではなく、社会・生態的な多様性に特徴づけられるインドの基盤を生かした総合的な資源運営のメカニズムから理解しようと試みたい。

【研究の内容・方法】(800字程度)

インドの繊維産業に関する研究は、組織部門の大企業を中心に発達してきたが、近年の輸出拡大に寄与した川下のアパレル産業などでは、生産の大部分を支える非組織部門の中小規模事業所を対象とした研究が増加している。なかでも南インドのニットウェア産業については、非組織部門の小規模工業を対象に、人的物的資源の経営実態がある程度明らかになっている。しかし、独自の特徴を有する北インドの布帛産業ははまだ解明途上にある。

このことから本研究では、北インドの主要アパレル輸出生産地を調査の中心的地域として設定し、その地域内における生産と、川上の素材産業との関連を、フィールドワークにおける聞き取りと参与観察から調べた。とくに同じ産業分類にあっても、ニットと布帛では製品の特性が異なる点に着目し、当該地域で必要とされる技術や素材の違いに注意した。

まず事業所間の請負構造を支える臨時労働力に着目し、彼らが持つ技術内容と、とりまく人間関係を観察し、生産現場への参入と移動の特徴を調べた。次に、基礎的な素材である生成生地と加工生地に着目し、物的資源の調達を観察から、需要と納期によって使い分ける様子を調べた。最後に、物的資源を納入する素材産地の事業所(北インドの染色・プリント・刺繍、南インドの紡績・織布・染色などの事業所)における生産を観察し、北インドへの納品と地場市場への納品を調べた。

【結論・考察】(400字程度)

調査により明らかになった3点を以下にまとめる。

臨時労働力の生産現場への参入と移動は、血縁・地縁や仕事縁などの既存関係と一般募集の併存で成立しており、開放性をもつ請負関係を形成し集積していた。労働力の現場移動は、臨時労働者のゆるやかなコミュニティ内部で技術蓄積を促進する側面がある。郊外工場という周縁での国内向け低品質衣料生産の現場から、デリーの工業地域という中心での輸出用婦人服生産の現場まで、技術グラデーションとそのルートでの労働移動を通じた熟練化の過程がみられた。

素材生地の調達は、南インドや西インドの産地と直接取引する関係と、地域内の事業所を通じた間接的取引の関係が観察された。安定的関係をもつ繊維産地との取引を基礎に調達しつつ、より短納期や小規模な加工需要に対しては地域内の事業所を使うことによって付加価値生産に対応することが可能になっていた。

素材産地内においても、国内外の消費地と地場市場に向けた商品の違いがあり、請負の重層的生産関係がみられた。国内の遠隔地で輸出製品生産の原料となる素材の品質やデザインは、国内都市部の市場や地場向け製品とは異なるものの、生産現場でこれらの製品に携わる人材が事業所間を移動することなどによって、輸出製品が国内製品に影響する部分、つまりグローバル化による技術移転が観察された。